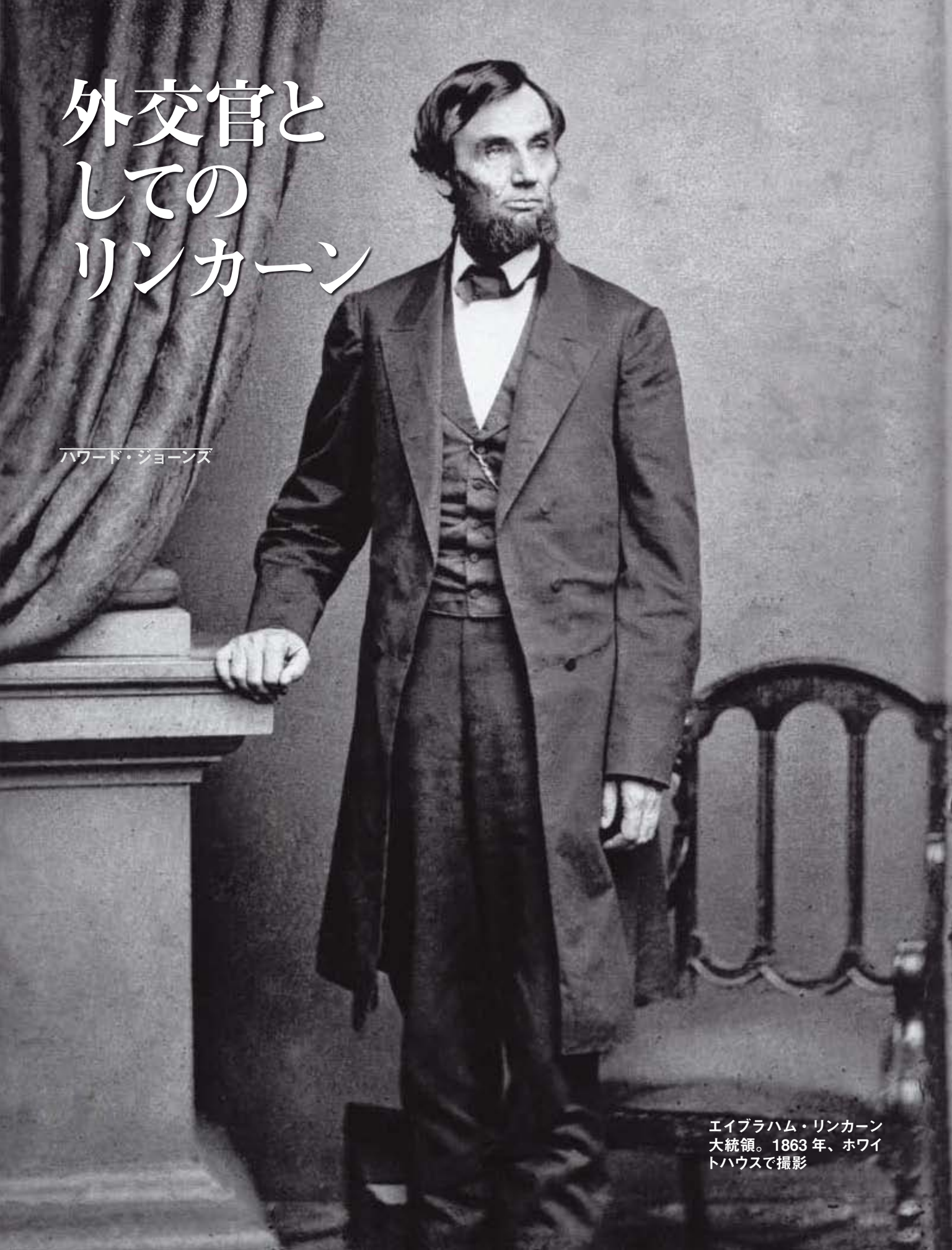
外交官としてのリンカーン

ハワード・ジョーンズ



エイブラハム・リンカーン大統領。1863年、ホワイトハウスで撮影

エイブラハム・リンカーン大統領の外交的手腕―南北戦争と在任期間が重なる大統領の業績を検証する際、このテーマが上位に来ることはほとんどない。リンカーンの軍事指導者探し、戦場での勝利の追求、個人的な試練、影響力を求めて互いに争い、大統領自身とさえ競い合う閣僚や将軍とのあつれき―1861年から1865年まで、自らとの

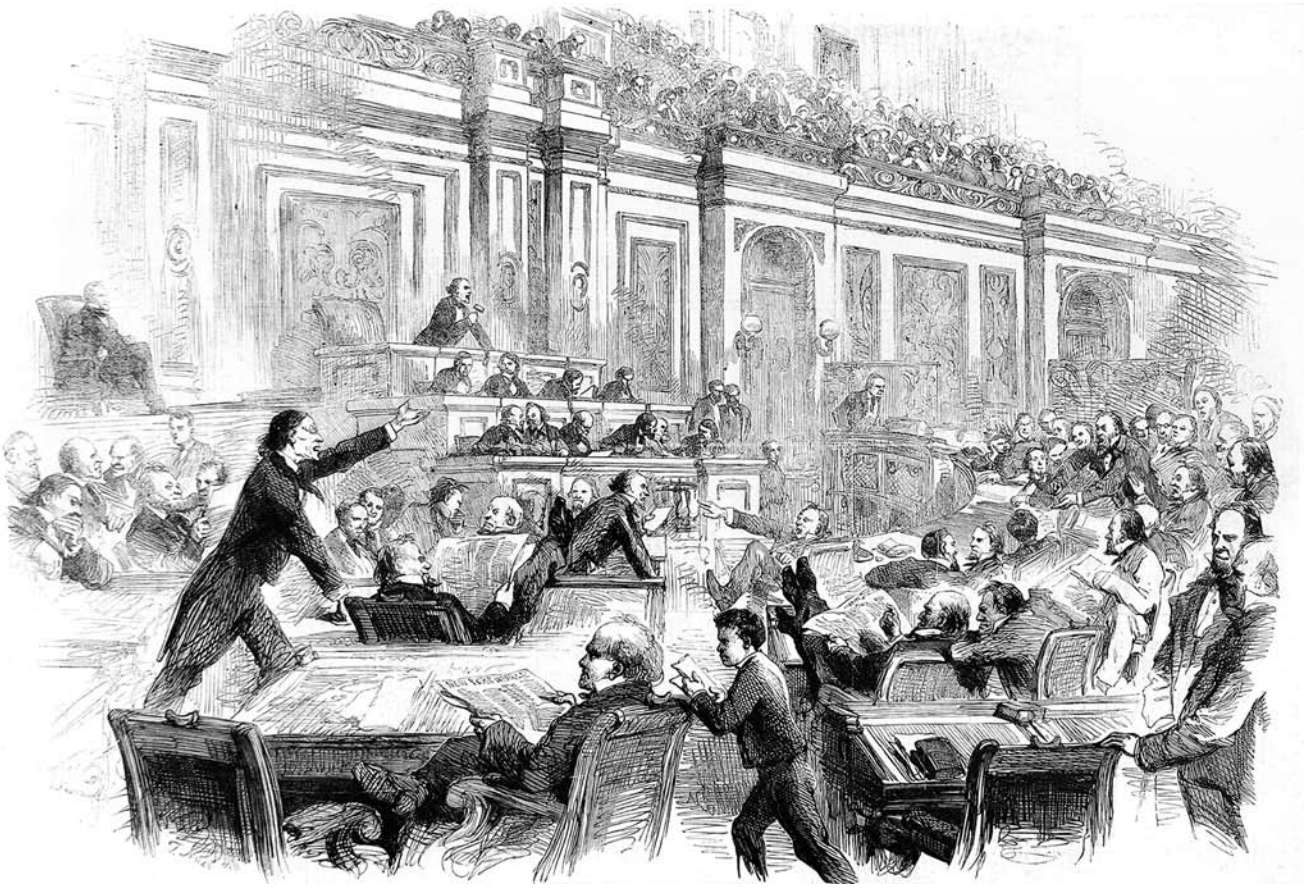
「ほとんどすべての人間は逆境に耐えることができるが、もし、その人格を試したいと思うなら、権限を与えてみるがよい」

戦いを繰り広げた国家を研究するときに、最大の関心を引くのはこうした事柄である。

けれども、連邦を維持するために戦争を行うと宣言した時、リンカーンはやむを得ず国境の向こう側からの挑戦をも受けて立つことになった。反旗を翻した南部が、英国をはじめとする欧州諸国から――特に極めて重要な意味を持つ戦争の最初の18ヵ月間に――外交上の承認を獲得していたら、南部連合国は独立を勝ち得ていたかもしれない。こうした外交面におけるリンカーンのリーダーシップが、連邦側の最終的な勝利を確実にするには、軍隊の指揮と同様に重要であったことが証明されている。

リンカーンはまさに外交家のお手本であった。リンカーンは外交問題についてはほとんど何も知らないと自ら認めていたが、最も優れた政治家に共通する特質を備えていた。すなわち、謙虚さ、誠実さ、良識と結び付いた知恵、どんな難局にあっても冷静に振る舞う態度、そして学ぼうとする意欲である。さらに、リンカーンには能力の高い助言者を任命する勇気があった。例えば、国務長官に任命したウィリアム・H・スワードは、以前はリンカーンと最も激しく張り合った政敵だったが、さらに重要なのは、スワードは外交問題に精通し、経験豊富であるということだった。2人の関係は最初のうちはうまくいかなかった。スワードは、自分が首相あるいは政府首班のつもりであ

ホワイトハウスで外交団と接見するリンカーン（1865年）



南部の連邦離脱をめぐる危機に揺れる連邦議会下院（1861 年）

り、リンカーンを道化師ではないにしても単なる象徴的リーダーに過ぎないと考えていた。しかし、スワードが性急に外国との戦争の可能性をあおることによって、北部と南部を統一しようと提案すると、リンカーンは静かにその提案を握りつぶして自分の優位を認めさせ、間もなくして、国務長官のスワードから尊敬と称賛を受けることになった。

2 面戦争の回避

1861 年 4 月の戦争勃発により、新大統領は最初の外交上の危機に見舞われた。連邦（北部）側の視点からすれば、この戦いは国家間の戦争ではなく、他国からの介入なしに鎮圧されるべき内乱であった。しかし、リンカーンが南部諸港の封鎖を決定したことで、連合（南部）側との交易の継続を望む英・仏両国は、国際法に基づいて戦争状態が存在することを認め、中立を宣言し、南部連合を交戦国として承認することが可能になった。同時に、こうした動きは南部を国家として承認する一歩手前の正統性を与えることになった。

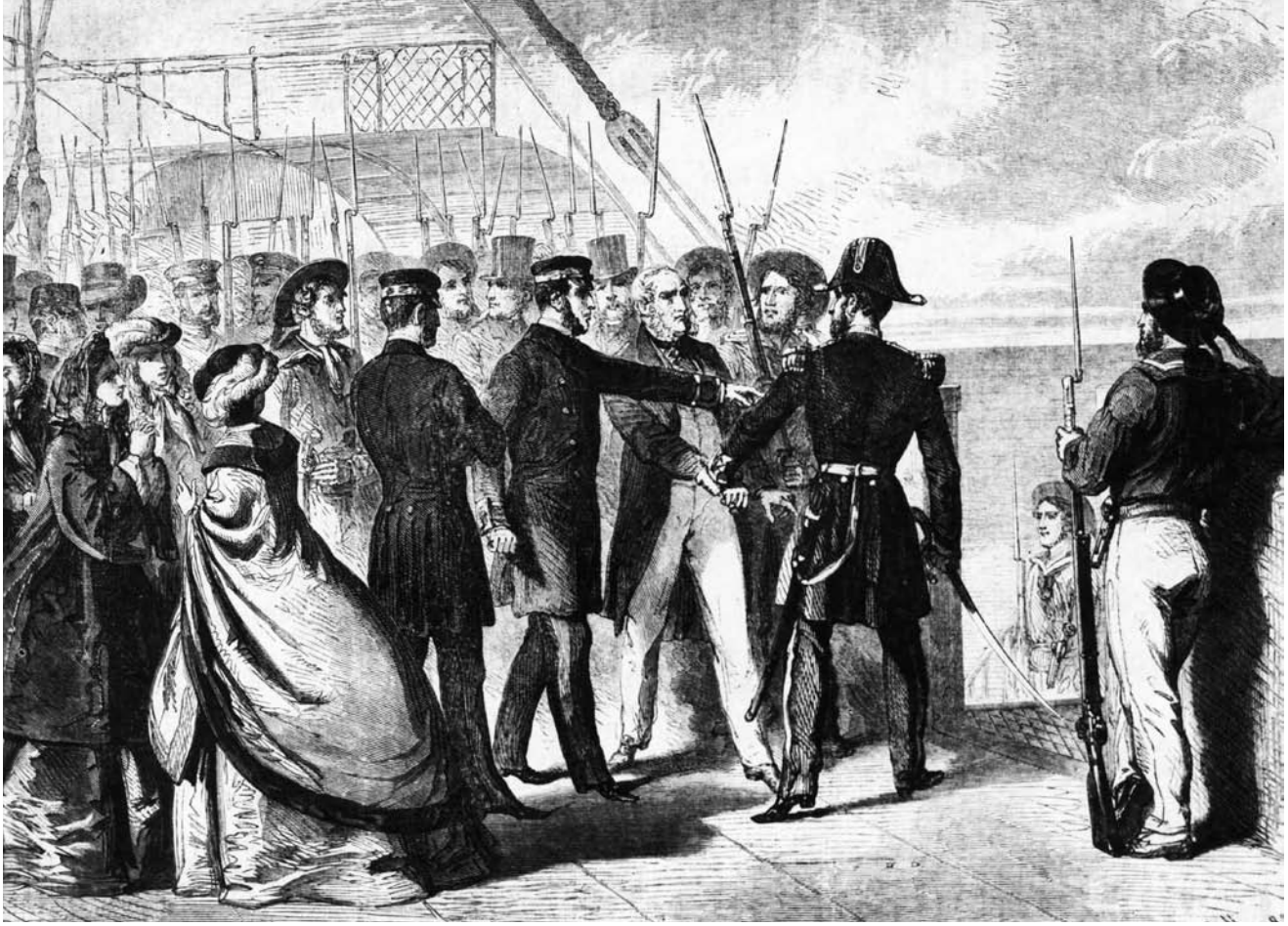
このためリンカーンの外交は、外国による南部独立の承認を防ぐことに重点が置かれた。リンカーンはいかなる形の外国の関与にも反対を続けた。ある国が和平交渉の促進に向けて尽力することにも、調停や仲裁あるいは休戦を提案することにも反対した。それと同時に、合衆国は干渉するいかなる国に対しても戦争に踏み切る決意であるとしたスワード国務長官の警告の調子を和らげた（ただし、放棄することはなかった）。また国務長官の文書に手を加えて穏やかな表現にするとともに、性格は温和だが毅然とした態度を示す英国駐在公使チャールズ・フランシス・アダムズを信頼し、ほかの問題の解決に当たらせた。

南北戦争の期間中、南部の承認問題は繰り返し表面化した。連邦側が 1861 年 7 月のブルランの戦いで屈辱的な敗北を喫したのを受けて、欧州の人々の中には、南部連合の独立は既成事実となったと確信する者もいた。連邦側はどうやって 11 州と何百万人もの人々に和解を強いることができるのか。その年の 11 月、合衆国海軍艦艇が英国の郵便船トレント号を拿捕し、連邦側の封鎖線を突破して英国へ向かう途中だった南部側の外交代表ジェームズ・メイソンとジョン・スライデルを連れ去った。リンカーンは賢明にも２人を解放し、米国の面子をつぶさないようにあいまいな言葉で過ちを認めることを許可した。これによって、かろうじて合衆国は英国および南部との２面戦争を回避することができたのである。

軍事上必要な行動

リンカーンが南部連合に対する外交承認を未然に食い止めるために用いた方策のひとつは、欧州の人々の間にあった反奴隷制感情に訴えることだっ

英国の郵便船トレント号を追い詰める米艦サン・ジャシント。
トレント号から連合側外交代表2人が連行され、米英両国
間の外交危機に発展した。



た。1862年秋のアンティータムの戦いで連邦軍が紙一重の勝利を収めてから間もなく、リンカーンは最高司令官としての軍事権限を行使して、1863年1月1日を期して、まだ反旗を翻しているすべての州の奴隷は自由の身になると宣言した。彼はこの画期的な奴隷解放宣言を「軍事上の必要性」に基づく行動であると特徴づけ、奴隷たちに対して、働いている農園を離れて前進中の連邦軍と団結するよう働き掛けることを意図していた。

いつものように、リンカーンは競合する目標を注意深く比較検討し、より大きな目標に向けて前進を図った。奴隷解放宣言には、南部連合に加わっていなかったケンタッキー、ミズーリ、メリーランド、デラウェアなどの境界州（および、すでに連邦側の占領下にあったテネシー州の一部）の奴隷についての言及はなかった。こうして、リンカーンはこれらの極めて重要な州の支持をつなぎ留めるとともに、北部の保守派と南部の連邦支持者を疎外することを避けたのである。それでも、リンカーンは自分の奴隷解放宣言が道徳的には正しいことを知っていた。また宣言はこの戦争を人道主義に基づく聖戦にまで高め、連邦側の士気を高揚させるであろうことを認識していた。そしてもちろん、奴隷の解放は、奴隷制反対の英・仏両国が南部側に立って参戦するのを防ぐのに役立つと考えていた。

（上）トレント号から移送される連合側外交代表のジェームズ・メイソンとジョン・スライデル。英国との関係悪化を避けるとともに、連合が英国の支持を失う可能性に賭けるため、リンカーン大統領は2人の解放を命令した。
（左）英国の諷刺画に描かれたジョン・ブル（右側）。「おまえなあ、悪いことするなよ。さもないと、痛い目に遭わすよ」と、米国を脅している。

大統領の外交感覚は正しかった。英・仏両国の指導者の多くは、合衆国が2つの対抗する国家に分裂することが自国の目的に最もかなうと計算していた。奴隷解放宣言はこうした風潮を克服するための有効な手段であった。英国の一部の政治家は当初、宣言は奴隷の反乱を扇動することで、窮地を脱して勝利をつかもうとする、連邦側の偽善的な行動であると考えた。もし戦争が奴隷制と関係があるとするなら、リンカーンはなぜ戦争の目的は連邦を維持することにあると宣言したのか。

実際、その年の11月、パーマストン卿を首相とする英国内閣は、南部連合を承認することによって連邦側に和平の話し合いを余儀なくさせるとい

戦争の終結に当たって、リンカーン大統領を迎えるバージニア州リッチモンドの群衆。リッチモンドは以前、南部連合の首都だった。

う、干渉主義的な提案を検討した。しかし同内閣はこの提案をめぐって投票を行い、特に英国がリンカーンと奴隷解放に反対する奴隷所有者側に立ったと見られることを嫌って、圧倒的多数で否決した。英国はこの後ロシアとともに、フランス皇帝ナポレオン3世の休戦提案を拒否した。この休戦提案は、米国で交戦中の当事者のいずれかが拒否した場合、多国籍軍による力の行使を背景に休戦を迫るというものであった（実際には、この提案は北部側に狙いを定めたものであった。というのも、休戦は事実上南部の独立を承認するものだからである）。1862年末までに、パーマストン内閣はリンカーンが奴隷解放を宣言するに至った要因として、リアルポリティク（現実政治）と道徳的な動機がそれぞれどう働いていようと、またリンカーンの本意が100パーセント純粋なものではないにしても、その結果は望ましく正しいものになるだろうということに気付いた。

自由の新たな誕生

そしてその通りになった。1865年4月、北部の勝利が最終的に決定し、リンカーンは連邦を救った。しかし、それは1861年の連邦ではなかった。戦争終結後、米国憲法の修正により、米国人は国内で二度と奴隷制を許さないことを保証し、リンカーンのビジョンの本当の大きさが明らかになった。リンカーンは、独立宣言の根底にある自然権［人間が生まれながらにして持つ権利］に基づいた自由の新たな誕生に一役買ったのである。彼は奴隷制と古い南部を破壊し、より良い連邦の出現をもたらした。巧みな外交家としてのリンカーンの役割は、欧州諸国の干渉を未然に防ぎ、南北戦争における、忘れられがちだが極めて決定的な戦いのひとつで勝利を収める上で、欠くことのできない要素だったのである。

ハワード・ジョーンズはアラバマ大学の大学研究教授で、『Union in Peril: The Crisis Over British Intervention in the Civil War』（危険に陥った連邦：英国の南北戦争介入をめぐる危機）の著者。